

患者の体位など)。③ 2人が1組となり、相手の差し出した鏡を見ながら自己の名前書き（ひらがな、漢字、ローマ字など）、図形の線引き、迷路たどり（単純、複雑なもの）。④ 各自での迷路たどり（複雑なもの）。⑤ 診療室内でデンタルミラーを用いて顎模型の歯を探針で触れる練習（マネキン使用）。⑥ 体験学習後質問紙調査（ポストアンケート：8項目）とした。

（結果）プレアンケートの結果では年度間に関係なく「日常生活において鏡を毎日みる」、「歯科健診や歯科治療に鏡を使用すると思う」、「歯科健診や歯科医院で鏡の使用を見た」との回答率が高かった。ポストアンケートの結果では「本体験学習は楽しかった」が、鏡を使用しての名前書き、図形の線引きおよび迷路たどりは「逆に写るところが難しく」、体験してみて「眼や首が疲れた」との回答率が高かった。また、平成17年度、平成18年度ともに「歯科診療においてミラーテクニックは必要だと思う」とすべての者が回答しており、さらに「本格的なミラーテクニックを習得したいと思う」および「本体験学習を受けて歯科医師になる目的意識があがった」との回答率が高かった。

（結論）質問紙調査の結果から本学歯学部1年生においてデンタルミラーは歯科健診や歯科治療に使用されているなど、その認知度は高いことがうかがえた。また、平成17年度、18年度ともに日常に使用されている鏡に関連したミラーテクニックの体験学習は鏡の日常の使われ方と異なるので「難しかった」、「疲れた」などの回答が多く認められたが、「楽しかった」と回答した者も多く認められた。さらに、臨床におけるミラーテクニックの重要性を認識することができ、将来、歯科医師になる目的意識が「あがった」と回答した者も多く、本体験学習の有用性は高いものであったと思われた。

#### 11) Ohio State UniversityおよびOhio Children's Hospitalの歯科麻酔臨床

○山崎 信也

（奥羽大・歯・口腔外科）

（緒言）学会や留学などを通して、世界的または全国的に進んでいる点を捕らえ、良いところ

は積極的に本学に取り入れていく必要があると思われまふ。今回、ニューオリンズでのIADR参加に先だつて、Ohio State University(OSU)で講演をする機会を頂き、同時に3日間にわたつてOhio State UniversityおよびOhio Children's Hospitalでの歯科麻酔臨床を視察する機会を得ましたので、その概要を報告致します。

（概要）OSUはOhio州Columbusにあり、日本で言うと仙台に気候、人口、治安などが非常に近い。OSUは多くの学部と多くの学生を抱え、広い敷地の中心にはフットボールスタジアムを持つ。歯学部の学生数や病院規模は当大学とほぼ同じであるが、患者数は非常に多い。歯学部における日帰り全身麻酔症例は日本の平均的な医学部附属病院よりも多く、関連病院であるOhio Children's Hospitalを合わせると、約2倍となる。いずれも外来部門よりも、日帰り全身麻酔部門の方が多くを占めている。

（結語）世界を見てくると、国際学会に参加すること、学問の交流を大切にすることに大きな意味があると痛感しました。麻酔が安全になると、苦しんで歯科治療を受ける時代ではなくなり、各診療科と歯科麻酔科のつながりが更に強くなると思われまふ。入院下では種々の医療事故が付きまといまふ。極力、不要な入院を減らした外来管理が、医療安全の面でも発展していくと思われまふ。麻酔管理症例を増やす事が、病院が利益を上げ生き残っていく手段にもなると思われまふ。

#### 12) ソケットプリザベーション後の治癒経過に関する臨床的検討

○塚本 光、宮下 照展、馬庭 暁人、渋谷 洋子  
中江 次郎、金 秀樹、大野 敬

（奥羽大・歯・口腔外科）

歯の喪失や歯槽部皮質骨の吸収によって生じた陥凹部分を長期間放置すると高さや幅径が減少し、歯槽堤の温存が困難となることがある。

今回、当科でインプラント治療前提の患者を対象にソケットプリザベーションを施行した12例15部位の中で経過を追えた2例と対照症例2例について輝度および回復率を用いて抜歯後の治癒経過について検討したので報告した。

検索症例の2例にPRP, PPPおよびアテロコラーゲンを填入材料として用い、エックス線撮影を術後1か月と術後3か月に行った。対照症例は検索症例と年齢的に類似し、エックス線撮影を術後1か月と術後3か月に行ったものとした。

輝度では抜歯窩に7点を設定して画像編集ソフトウェア、フォトショップを用いてピクセル値で表した。ソケットプリザベーションを施行した症例は対照症例に比べ術後1か月から術後3か月の間で増加量が大きくなる傾向にあった。また、回復率で画像解析ソフトNIHイメージを用いて抜歯窩全体の面積と骨の再生が認められる部分の面積を比率で評価した。ソケットプリザベーションを施行した症例は対照症例に比べ術後1か月から術後3か月の間で回復率が高くなる傾向にあった。

今回の検索から、抜歯時にソケットプリザベーションを施行することにより抜歯窩の治癒促進に関して良好な成績を得ることができたが、ソケットプリザベーションの有用性を評価するには症例数も少なく観察期間も短いため、今後さらに症例数を増やし評価時期や評価方法を統一させ検討する予定である。

### 13) 転移リンパ節により内頸静脈が狭窄・消失した1例

○酒井 進, 宮島 久, 吉開 義弘, 強口 敦子  
本間 濟, 堤 貴洋, 佐々木健聡

(会津中央病院歯科口腔外科)

(緒言) 口腔癌において頸部リンパ節に転移が存在する場合、頸部郭清術が行われることが多く、手術時には内頸静脈と共に摘出される。今回、転移リンパ節によって内頸静脈が狭窄し、手術が難渋した1例を経験したのでその概要を報告した。

(症例) 73歳の男性。主訴：左側舌側縁部の疼痛。既往歴：16, 7年前に脳梗塞。4年前より糖尿病にて加療中。現病歴：初診の約半年前より左側舌側縁部に疼痛を覚え、1, 2週間前より疼痛が増大し紹介元を受診。舌腫瘍の疑いにて当科紹介。生検にて中等度分化型扁平上皮癌の診断。全身精査にて転移病巣なく、舌部分切除術を施行。術後10ヶ月目より左側頸部リンパ節の軽度腫大を認めたが精査の結果、転移病巣無しとの診断。術後

16ヶ月目にははっきりとした転移病巣を認め全頸部郭清術を施行。術中所見にて、転移リンパ節は節外浸潤しており、同部にて内頸静脈は狭窄、その中枢側で消失していた。頸部郭清術後5ヶ月、呼吸器不全で死亡退院。

(考察) 予後不良に至った原因は転移リンパ節の迷走神経浸潤による呼吸器不全と考えられた。画像所見はリンパ節転移の診断に有用ではあるが、確定できない場合も多く、呼吸器症状などの所見も参考に診断や予後判定をする必要があるものと考えられた。また、呼吸器機能が悪化しても、口腔ケアを適切に行うことで、QOLの向上は期待できるものと思われた。

### 14) 顎関節症状を有する患者の矯正再治療について

○板橋 仁, 高田 訓

(奥羽大・歯・成長発育歯, 口腔外科)

(目的) 顎関節症状を有する患者で動的治療を終了し保定期間中に症状が悪化した症例について、再治療前後のアキシオグラフによる結果をもとに検討した。

(症例の概要) 初診時年齢14歳5か月の女子。打撲により上顎前歯を不完全脱臼し口腔外科で整復固定処置をうけた後、前歯の噛み合わせを治したいとして矯正歯科を受診した。アングルの分類はⅢ級で、前歯の被蓋関係は切端咬合を呈していた。顎関節には軽度のクリック以外の所見は見られなかった。下顎骨体部の過成長を伴う開咬傾向のskeletal Ⅲと診断し、骨格性要因は強いものの患者の希望により矯正単独で治療を行なった。

(治療経過) 上顎左右第二小臼歯, 下顎左右第一小臼歯を抜去し、マルチブラケット装置にて治療を開始した。途中、クリック以外にも開口障害が見られるようになったが、被蓋改善を優先し2年6か月後に保定に移行した。その後事情により通院せずリテーナーも使用しない状態であったが、保定から3年後に前歯の噛み合わせが気になり矯正再治療を希望して来科した。上下顎とも前歯部に後戻り傾向が見られ、それに伴う早期接触も認められた。顎関節症状が悪化したため口腔外科にてスプリント療法を、引き続いて矯正再治療を行